

て、鐵道を惡み其敷設を禁じた位だ。で、皇帝が崩じた頃は露西亞には聖彼得堡と莫斯科の間に一本の線路があつたばかりだ。その線も至て不完全なもので、商人が荷を送るに安全で安價い方法として却つて馬力車に據つたと云ふほどである。

然るにクリミヤ戦争の敗北は解放を持ち來した。亞歷二世は幼時から其父君を尊敬するやうに育てられたのであるが、それでも皇位に即くや否や先帝の作つた法律のうちで最も非條理なものだけを餘義なく改除した。それが長いこと口輪をはめられ足械をされてゐた國民にとつては、何でも是からは先帝ニコラスの施設に對し自由に批評することも罷されれば、萬事を改革するのが今帝の意志であるやうにも受取られた。クリミヤ戦争の當時既にヘルツェンは倫敦で露西亞語の印刷所を起し、週聞新聞『警鐘』(Kolokol)を發行して、古い施政の罪惡と愚劣を自由に大膽に究問しかけた。露西亞で斯様な言語が聞かれ、斯様な筆舌の揮はれたの

はこれが始めてである。その大膽さが讀者をかり立てて凡ゆる人の心を引附けた。で、ヘルツェンは間もなくその邦で最有力な者となり、知識ある青年達の指揮官となつた。彼は全智の人のやうにも受取られた。なせなら、本國から追はれてゐても、その國の出來事は細大漏さず彼の注意に上つたほど、よく諸方面から通信されてゐたからである。例へばカゼリン二世の日記だと云ふやうな宮中の秘書まで彼は公にした。また國內の諸方面で起つた押領、詐偽、不正殘酷な事件を一一摘發した。彼は國內にいろいろの連絡をもち、それが宮中までも跨つてゐた。ある時皇族の副官をしてゐる某將軍を『警鐘』で手酷く攻撃したが、發行の即日原文の儘の一部を聖彼得堡で刷つて皇帝の机の上に置いたものがある。(皇帝は常にその新聞に眼を通してゐた)。それから一二週経つてから其原本がまた小包で皇帝の所に届いたが、その中にはなせ斯うして送れるかと云ふ理由が簡單に書いてあつた。一八五九年にこの新聞が亞細亞からニヅニに密送される所を警察で押收



したが、その地方の分だけでも拾萬部からあつたと云ふほど汎く讀まれたものだ。それからと云ふものは急に反對や進歩を標榜する種々の團體が出来た。それにはニコラス皇帝が獨裁權を擅にする爲に斥けた貴族側のもものが、反對に宮中に踏つてゐる獨逸人を排斥する爲に起つたものもあれば、平民を理想化する純露主義の一團もあつた。それからヘルツェン黨、オガレフ黨に次ぎては、西比利亞から遁げ歸つたバクニンの懷疑的、急進的、社界主義的の黨派もあつた。で、是等のいろ／＼の團體が時勢に促がされて初めて露西亞で新聞を起すやうになつた。四十年代まで露西亞には官報よりほかには定期刊行物がなかつた。ニコラス帝の代に出た「露西亞の蜂」と題する新聞はロモノゾフやデルチアピンなど云ふ古典派詩人の精神を受けついだアカデミーの機關で、プシユキンの起した浪漫派に反對してゐた。十九世紀の國民的詩歌に始めて解釋を與へたのは大批評家ビエリンスキーである。文學的書肆クレエブスキーなる者が「我等が祖國の編年誌」

と題する新聞を起し、其誌上には断えずビエリンスキーの清新な論文が現はれた。で、恚様な文學的鬭争の一生に疲れて、貧と病のために、一八四七年、この大批評家が死くなつた後では、雜誌「現代」(Sovremennik)がその新聞の跡を繼いで、詩人ネクラゾフが筆を執り、また五八年から六二年にかけて重にチエルヌイシエプスキーが氣焔を昂げてゐた。この人は小説の作家としてまた經濟學書の著者として、その時代に深い印象を残した人である。然かし露西亞で定期刊行物が世間から重く視られるやうになつたのは、クリミア戦争の終からで、ヘルツェンが記者として初舞臺をうつてからである。それ前は記者の位置は至て見素ぼらしいものであつた。なせなら、其頃の學問のあつた連中は皆な佛蘭西語で讀んだり話したりしてゐた爲め、母國語の雜誌的記事はてんで頭から輕蔑してかゝつた。そればかりか、當時の彼等の頭は純文學上の問題にばかり注意するやうに餘義なくされてゐたので、露西亞文學は國粹的である



べきや否やと云ふやうな問題ばかりに關はつてゐた。

然るに六十年代の終になつてから、數百の新聞雜誌が急に起つた。エツカルトの報道によると一八五八年から六〇年の間に七十七以上の大きな新聞が左程眼立たずに廢刊したと云ふほどであるから、如何に其數の多かつたかが思はれる。それから、今日でも然うだが、厚い一冊の書籍とも見えるやうなさまざまの大きな月刊雜誌が現はれて、政事上の解釋に資する爲めに、自然科学、文學史、經濟學などの著作の梗概を掲げたり、英獨佛及び自國の作家の長い社界小説を出し始めたりした。日刊新聞は皆なスラブ族本來の狂熱を以て最極端の急進主義に走つた。彼等は歐洲文明が達した高所へ上つて眼を廻した。今迄は西方歐羅巴の生活状態など少しも知らなかつた都會の青年、地方の歸化人などが皆な急にその方へ導かれた。

その時凡らゆる人の思想に上つた第一の問題は平民の教育と云ふことであつた。

この邦には殆んど學校らしいものがなかつた。で、田舎にあつた極く僅かのものは無學な僧侶の手に委ねられてゐた。田舎町の坊さんが教師をしてゐた。然るにその頃から都會を初めとして地方の各方面に日曜學校が起された。それ等の學校の先生は、人民の教化に對する眞の熱心から、皆な無給で働いた。軍隊では士官が同じやうな學校組織で新兵を教育した。近衛士官が一番に教師として拔んでゐた。

亞歷二世の統治の初期に異彩を放つた大きな廣い改革は斯様な事情のもとに起つた。その第一は一八六一年の二月十九日に行つた農奴解放である。五百萬人以上の人間に身體の自由が與へられ、露西亞の土地の所有權が分配された。當然の結果として今までの貴族地主の權力が非常に縮小された。この改革は同時に民主的でもあり、專政的でもあつた。と云ふのは、それが丁度、今迄尊敬されてゐた官憲がその威嚴を失墜した時に起つた。クリミヤ戰爭の敗北は軍隊の名譽を傷



け、政府の怠慢、過失、腐廢をさらけ出して、彼人の權威に一大打撃を與へた。加之に僧侶社界は初めから見送られてゐた。然るに、この改革の一撃は前代未聞の方法を以て貴族の權力を削ぎ、斟酌なしにその財産の大部分を取上げた。そこで、恣様な社界的改革が先に來た結果、政治的改革的希望は消されて了つた。永い間上流社會では「憲法」を望んでゐた——それが最初には貴族の憲法でなければならんと思つてゐた。處が、恣様に皇帝の權力が一時に増大されたので、政治上の自由主義には行末の希望が無くなつた。社會のあらゆる高い嶺は切り崩されて、皇帝の權力の位置だけが其儘で残されたばかりか、却て邪魔物のない爲めに、軍隊や百姓の上にもまで其れが擴張された。

數多い農民も亦決して満足は爲なかつた。永い間彼等は樂園的の希望を抱いてゐた。そして今度の改革に際しても、殊に社主義的の宣道者が彼等の空想を強めてからと云ふものは、自分達の耕してゐた土地だけは何等の賠償なしにその手

に渡るものと思つてゐた。然るにその空想が外れたので、失望のあまりカザンやボルガ地方では百姓一揆を起した位である。同時に學生間にも騒動が持上つた。一時は、各大學の學生を三百人に限ると云ふ馬鹿げた制限も撤去されて、學生は急に今迄の近衛士官にも優るやうな特權を得た。處が僅か三月後には、農奴解放が各方面の人の心に起した騷擾の餘波をうけて、大學取締法の發布となり、學生のあらゆる自由は剝奪せられ、希望も何も斷たれて了つた。集會の自由は奪はれ、慈善基金を集めることも禁じられた。そればかりでなく、學生の數を減らす爲めに、一學期五十留の授業料を徴集した。大學のある市では莫斯科でも聖彼得堡でもキエフでもカルユフでも、青年は一際立て新規則に反對した。警官や軍隊との衝突が起つた。

一八六二年に露西亞國內の騷擾はその極點に達した。革命の氣勢が聖彼得堡では所々で恐ろしい火事となつて洩れた。政府は益々干渉の手を強めた。放火者



ばかりを取扱ふ裁判所を開いたり、日曜學校やいろくの學會や俱樂部を閉鎖したりした。新聞の取締も八ヶ間敷なり、檢察官はいよ厳しくなつた。

恚うして、波蘭で其主謀者の盲動と總督ツキーロポルスキーが反逆的危險思想に對して採つた無謀殘酷な處置との爲めに、一揆を引起すやうになつた頃は、露西亞のあらゆる保主的暴怒と威力が新しい力の芽を萌く時であつた。

この時までアレキサンダー、ヘルツェンは教育ある露西亞人間の立物であつた。彼は常に迫害せられた波蘭に對して滿腔の同情を示して來た。今度の暴動で、西歐の強國が波蘭を保護し露西亞を貶するやうな態度を採り、それが爲めに國內の自由主義者の間にすら國民的感情を牽起した際にも、彼は猶熱心にその反亂を辯護するのであつた。

その時舞臺に現はれたのはカトコフである。彼は極く短日月の間にヘルツェンの手から總ての權勢を奪ひ取つて、一躍露西亞に於ける最有力者の位置に上つた。

この著名な人物は、つい一八八七年の八月に逝くなつたが、二十五年間と云ふ長い間、彼は壓制國の生きた壓制主義を代表してゐた。彼はその間野獸的勢力を擧げて、何んでも自由に反對する凡ての物を推奨し、非露西亞的ないかなる物をも筆誅した。大帝國統一の建設を鼓吹し擁護した。

ミケール、ニコロヴツチ、カトコフの出現は露西亞の歴史に於て獨異の顯象である。この帝國が創まつて以來、たゞ一個の政論家として、官位もなく何等の權力もなく、それでゐる政府の施設に多大の勢力を及ぼし、政府自身よりも大きな勢力を振つたと云ふことは、カトコフを以て始めとせねばならぬ。たつた一つ此點では、彼の生涯は正に新時代に一步を進めたものと言ふことが能きる。然かし、彼が斯様な勢力を得る爲めに採つた手段を討ねるならば、我等の満足の原因は消えて了う。彼は屢ば眞理の主張をも正義の要求をも無視して、一意専念に國民的虛榮心に媚び、最も忌むべき方法で國民的自尊心を煽動した。彼は恣様な手



段で勢力を得た。

カトコフは初め莫斯科大學の哲學教授として世に立つた。然かし哲學史に貢獻するほどの功績もなかつた。彼は最初から獨逸哲學の祖述者で、殊にシエリングの崇拜者として、熱心な諷刺家のビエリンスキーや有名な國際的革命論者のバックーニンと同じ黨與であつた。で、彼自身理想家と稱び、理想主義を布教した。一八四八年、彼はその主義の爲めに自分の位置を失ふやうになつた。

一八五六年に彼は『露西亞の使命』(Russki Vestnik)と言ふ月刊雜誌を發行し、次いで一八六一年に『マスコバイト新聞』(Moskovskiya Vedomosti)と云ふ日刊新聞を管理した。彼はそれ等の新聞雜誌記者として、最初は極端な英國流の自由主義を採り、権力分配、憲法發布などを號呼してゐた。所が、一八六一——二一年に、急進黨が爆發し、農民や學生間に一揆を起して小膽な國民を驚かし、その邦の高い位置にある男女間にも倫敦に於けるヘルツエンの革命黨に加參してゐる者の多

いことが知れ渡つてから、國民の感情の一變すべき兆候が現はれた。

そこでカトコフは、今が立脚地を變更するに最も好都合な時だと感付いた。『露西亞の救世主』として立たうと決心した。彼は先づ國を追はれてゐる自分の友人のヘルツエン、オガレフ、バックーニンなどに關して露西亞の全新聞の上に蔽ひ懸つてゐた沈黙を破つた。彼等の生存は公然には政府の知らないことになつてゐる。彼もまたその人々の名を明には掲げなかつたが、然かし彼はそれ等の人達を目して父國の敵とし騒動の教唆者として明白に攻撃した。是が教育ある露西亞人間に於けるヘルツエンの勢力に與へた最初の打撃である。で、一八六三年、波蘭の反亂に際して、ヘルツエンが露西亞の國民的感情を害するやうな不謹慎な眞似をした時に、彼の死命を制したのもカトコフであつた。彼は外國にゐる亡命者や虚無主義者のことを『國家に不忠な反謀人』と呼び、慷慨の語氣を發つた。唯一揆を追討するばかりでなく、波蘭の獨立を取消して露西亞の一州とすべしとさ



へ主張した。その騒動が静まった頃は、カトコフは最早露西亞の上流社会で一番の人氣役者になつてゐた。『絞殺指令官』としてムラビエフをヴイルナに送るやうになつたのも彼の力である。

この時からカトコフの勢力は、露西亞の保守主義が榮えると與に榮えた。保守主義とカトコフとは同心一體であつた。

先の哲學者は其後最も熱心な希臘正教の宗徒となつた。先の英國流の自由主義者は今では國民的專政主義の崇拜者、擁護者となつた。政府よりも猶國民的で、帝王よりもなほ帝王的であつた。彼と王室または皇帝との争は夫婦喧嘩に過ぎなかつた。それも彼の方が餘り熱心過ぎる所から起つたのだ。

彼の勢力は想像以上に達した。で、恚んな事まであつた。或時大臣が彼の新聞に禁止を命じた所が、彼は構はずそれを發行してゐた。唯だことはり書を附けて『この新聞は禁止されたが多分何かの誤謬であらう』と言つて濟してゐた。が、そ

れはその儘咎められずに了んだ。皇帝が彼を庇護つてゐたからだ。

その時から波蘭は、純露主義者にとつては厭ふべき西歐羅巴、厭ふべき加特利教の標象と目された。

かくて一八六六年にはカラコゾフが亞曆二世を狙撃した事件が起つた。それが時の歴政々策に掉尾の勇氣を與へた。カトコフは喜んで斯う叫んだ、『カラコゾフの打つた短銃は空氣を淨めた』と。然かしその頃から徐々に反動の氣勢が昂まつて來た。國內の各所で壓制の度が過激になるにつれて、革命の傳道や政治的暗殺の企が起つた。で、政府の追窮が厳しければ厳しいほど、反動は却て倍の熱心を以て新しく歩を進めた。あらゆる物がその氣勢を強め、あらゆる物からその便利を得た。ツルゲーネフの描いたやうな昔の『虛無主義』——主に知識上の開放を其主張として、基督教の攻撃に全力を注ぎ、科學を尊重し、從て藝術をも不必用、非民主的として排斥する——は一八七〇年頃失くなつて了つた。巴里に於ける同



盟一揆、國際社會黨の爆發などが當時の青年の心に活動の血を沸かした。昔の「虚無主義者」の個人的急進主義の代りに、社會主義を宗教とし「人民」を神とする新時代が起つた。

露西亞の各方面から若い娘達が醫學と社會主義を學ぶ爲めにツォリツヒに寄集つた。一八七二年には公爵クロボトキンが聖彼得堡の郊外で職工の間に交つて働いた。七十年代の始めには、高貴の家に生れた幾百の多勢の青年男女が「人民の中に行つて」、彼等の間に近世思想を吹込む爲めに、野や工場で、一日十二時間も十五時間もの勞働に従事した。然かし噂の喧しい田舎町では傳道者の侵入が、長く警察や役場に知られずに濟まなんだので、次第に捕縛される者が出來て來た。一八七六年の官廳の文書によると、三十七州以上の地方が「社會主義の流行病に罹つた」と報告されてゐる。一八七六年から七七年にかけて恣様な狂熱的青年男女の殆んど全部が薙ぎ仆されて了つた。何の獄舎も國事犯で一杯になつて、續々

新しい物を建て増す必要が起つた。些とした嫌疑が掛つても速ぐ牢屋に打ち込まれた。「平民の中に行つた」友達からの一本の手紙でもが、または警官に質問をうけて、驚いたなり、何を謀つたか分らない十二歳の小供の返答でもが、充分の證據になつたので、ひどい絶望の結果が、一八七六年から七八年にかけて、露西亞の諸方の町で、葬式とか死刑の宣告とか云ふ機會のあるたびに、無意味な示威運動や小騒動になつて持ち上つた。それから斯様な示威運動の無功を自覺した結果は遂々暴力黨の發生となつて現はれた。暗殺によつて一擧に事を決しやうと云ふのだ。

初期の傳道隊は七十年代の末に「百九十三人の處刑」を以て終を告げた。是等の薄倖な人達は、徐かな詳細な取調の續く間、四年間も牢に入れられてゐた。その時代の露西亞の監獄制度は餘程苛酷で、百九十三人のうち七十五人までも自殺をしたり、氣が狂つたり、病死したりした。その事件のために特別裁判所が開か



れて、政府の利益になるやうな公判よりほかには期待されなかつた。ある者は十年、十二年、または十五年の苦役に處せられた。單に數人の勞働者を集めて二三回説教したとか、或は一冊の書籍を買つたり借りたりしたとか云ふ件で。で、國事犯の囚徒は特別に苛酷な取扱をうけた。カールコフの中央監獄(「恐怖の家」)では、普通の囚徒と同じ待遇をうける爲めに幾度か騒動を率き起した程であつた。他の點では至極從順な亞歷二世の元老院が、特赦の形で百九十三人黨の多數を放免する決議をしたが、皇帝自身それを許さなかつた。

一八七七年にはヴィエラ、ザスリツチが、國事犯の一囚徒を鞭たしたトレポフ將軍の暗殺を企てた。で、法官が彼女に無罪の宣告を下した事件が全歐羅巴の注目を牽いた。一八七八年の八月には「ステプニアツクの」小銃から發た彈丸が、白晝公道で、警視總監メセンチエフ將軍を殺した。それから種々の暗殺事件が続いた中で、皇帝亞歷二世に對するものが四回あつた。その始めは一八七九年の四

月二日に起り、最後のものは一八八一年三月十三日の出來事で、之が爲めに皇帝は不慮の最後を遂げられた。

この最後の事件ほど露西亞を退歩させたものはない。その爲めに期待された國會の開設は直ぐ廢めになつた。先帝がその治世の始めに採つたやうな方針は、却て新皇帝を驚かした。そして凡らゆる種類のものを人民から取返し、禁止する口實を治世者に與へた。

怎樣にして彼等は今日のやうな立場に達した。政綱ならぬ政綱——恐怖と躊躇の政綱に。

露西亞では凡ての學問が怖れ嫌はれてゐる。オデツサの監督官が出した注意書(公報ではないが、それ丈の効力のあるものだ)に依れば、學務委員は小學校に入學する兒童の父兄に就て、充分の資格のある者か何うかと云ふことを查べる義務がある。で、委員はその兩親の生活情態から、家の大小、室の數、年收、その家



に出入する人々の名までを詳しく知つてゐなければならぬ。

少しでも不穏な徴候があれば、大學は直ぐ閉鎖されて了ふ。一八八八年の春に莫斯科で些細なブリスガロフに對する耳打事件が起つたとき、全露西亞の大學は皆んなその災に遇つた。生徒の惡戯を怖れて、聖彼得堡、莫斯科、カザン、カルコフ、オデッサの各大學とも一時に閉鎖された。

その後、またオデッサの大學監督は次のやうな新しい訓示を發した。「近來二三の教授中には文教に携はる自己の位置をも顧みず、また其位置に關係なき問題に對し自己の責任をも問はずして、公然其意見を發表する輩があり、猶ほ或者は社會上のある結社の會員として、公然黨議に携はり、甚しきは新聞紙上の論争にまで關與する者を見受ける。——が、右は不都合に就き、學校監督は今後諸教授に對し充分の謹慎を望まざるを得ない」と言ふのである。

斯様にして大學の教授は、社會上及文學上の問題に關し討議することを禁じら

れてゐる。で、其訓示の終に、教授連は文教上の問題を一意専念に攻究することにのみ其閑暇を費せと言つてゐる。

何でも、嘗て或る俱樂部で微賤な一人の學校教員が、カトコフの批評をしたとか云ふので、恚んな結果になつたのださうな。

要するに、我々西歐人には斯様な學校監督の下にある文教の程度は想像にもつかない。一八八四年にキエフ大學の學生が其學校の開校五十年祭を祝する爲めに宴會の用意をした。所が、監督は不道理にも學生が其祭典に關はるを禁止めたので、學生等は激昂のあまり監督に恥辱を加へた。すると、有名な宗教院長のポビエドノスチエフは、徵罰の意味で全學生に退校を命じた。恚様な暴舉を稱讃する者は露西亞にも僅つた一人しか無かつた。それはカトコフである。彼は斯う言つた。若し學生の中にその同盟に加はらなかつた者が在つたにしても、其者は之を差止めなかつた點で責任がある。



私はある信すべき筋から次のやうな話を聞いた。つい近頃のこと、ノビコフと言ふ學校監督が、ノブゴロッドの某學校へ視察に行つたことがある。彼はその學校の教師の藏書の中から二冊の本を見付出した。その一冊はコロレンコオの小説を集めたもので、他の一冊はドストイエフスキーの物だ。最初の書物の著者が何んな人であるか、彼は些しも知らなかつたが、唯だ出版者の名がゴルチェフと言つて、穏和な自由主義を懐いて、莫斯科で雑誌「露西亞思想」(Russkaya Mysl)を發行してゐる者だと云ふことが判つたので、彼は不機嫌な調子で恚う言つた。「斯んな社會主義者の出す物を讀んでは困りますなあ。然かし、ドストイエフスキーの物を持つてゐるなんて猶甚いですなあ。どうも彼の男の書いた物には艶種が多過ぎる。そりや勿論基督教的の戀愛でしやうが、何ちらにしても戀愛は戀愛だ。その戀愛と云ふ奴は始めは好いが、最後が困るので。」

で、恚様な學校監督、殊に都會の大學を監視してゐる者の勢力が、何れだけ大

きいかと云ふ事を充分に知つたならば、時々新聞に現はれる教育上の奇怪な事件も左程驚くには當らない。先頃の某新聞に據ると、この春聖彼得堡の上流社會で開かれた眞面目な心理學の講演會で、哲學教授ウラヂスラブレフは斯學の大要を述べた中に、尊敬の情と云ふ事を説明する條で恚う言つた。「この情はその對者の收入に比例して増減する。茲に一個年三千留の收入を有する人があるとすると、其人は一千五百留の收入を有する人よりも必然的に大なる尊敬を拂はなければならぬ。また茲に一個年七百萬留の收入を有する者があるとする(暗に皇帝を指してゐる)其人は必然的に巨人の印象を與へなければならぬ。之に引換へて、貧困は不關心または輕蔑の情を引起す」と。で、彼は冷笑の意味でなく、眞面目に心理學の原則として之を述べた。

恚んな監理法や教授法の行はれてゐる邦で、青年が高等教育を受けることの困難は判りきつてゐる。女は猶更だ。で、試験を受けて學位を取るのには兎に角、大



學の講義を傍聴することへ禁止されてゐるのだが、それでゐて露西亞の若い女達は何の歐羅巴の邦々の者よりも科學教育を渴望してゐる。丁度十年前、聖彼得堡と莫斯科の進歩主義の教授達が、グリーア教授を頭にして、兩都で女子大學のやうなものを起したことがある。諸大學の教授や知名の士（ベセロフスキーやストロスエンコなどの）が無報酬で教えた。十七歳から二十歳、其年長位の娘達が大勢群がつて、科學數學歴史文學その他の利益になる講義を聞いた。勿論是等の講義は政治問題には關係なかつた。が、皇帝は餘りそれを喜ばなんだ。で、卒業式に女皇カゼリン及エリナベスの肖像のほかに現皇后マリア、フェオドロブナの肖像をも掲げたいと云ふことを上奏したが許されないで、已むなくその像の位置に年月を記入して御茶を濁したことがある。去年の春、遂々訓令が出て、一八八七年の六月以降、女子大學の閉鎖を命じ、なほ此種類のあらゆる學校の設立を禁じた。露西亞の女性をして舊の家庭に復らしむるの希望を皇帝自身が洩し

たと信せられてゐる。

斯うしてこの邦の有爲な青年の大部分が育てられるのだ。

ガルシンが次のやうな意味の小説を書いた。恠様な國情の下では、青年が高い位置に上らうとする凡らゆる努力も無駄であると云ふことを諷したものである。

一本の棕櫚の樹が、熱帯地方から聖彼得堡の或る温室に移されたが、故郷の晴々とした空と焼け附くやうな太陽を戀ひ慕ふ餘り、早く生長して温室の屋根を突破つて自由を得やうと思つた。やがて屋根の硝子はとう／＼其枝の力で推し破られた。曲りくねつてゐた枝は戶外の生々した空氣の中に延びた。所が、冷たい風と濕つた雪に出逢つて、凍りついて、幹は次第に枯れて了つた。温室の持主は樹を切り去つた。



「露西亞の新聞！僕はこの言葉を聞いた時に腹が立つ、恚う其邦の好く賣れる一新聞の編輯者が言った。露西亞には一枚だつて新聞と名づくべきほどのものがない。印刷機械や紙はある。勿論白い表面へ黒い印を附けた物もある。編輯者もあれば記者もある。然かし新聞はない。在りえないのだ。」

四國の事情から、露西亞の新聞紙と云ふものは政治上有意義な物となることか能きない。よしそれが検閲官の手を経るにしても、經ないにしても。

外字新聞で有名なのは、佛蘭西政府の御用を務めてゐる「ジョーナル、ド、セントペテルスブルグ」で、次は二大獨字新聞「セント、ペテルスブルグ、ツアイツング」と「セント、ペテルスブルグ、ヘラルド」である。猶ほ莫斯科にも小さな獨字

新聞「モスコ、ツアイツング」が在つて、極く穩健な態度で、機會のあるたびに獨露間の優越親善な關係を説いてゐる。それから邦字新聞では、政府で出す物や、小さな紙面に軽く面白く、時には馬鹿化した調子で記事を掲げる通俗新聞のほかに、一般に讀まれる物としては聖彼得堡から出る二つの新聞がある。その一つは、「新聞」(Novosti)と言ふ所謂自由主義の生真面目な調子の物で、ノトヴィツチが編輯してゐる。また政治問題以外の缺くべからざる助力者としては、有名なハインネの翻譯者で詩人ワインスベルグがある。ノトヴィツチは素と猶太人の出なもので、時々紙面で猶太種族の肩を持たされる。全體の調子が嚴格で真面目で熱心で、歐洲文明の鼓吹に務めてゐる。然かし、それでゐて、英國や獨逸に對する態度は愛國的である。

「新聞」に何時も反對してゐるのが「新時代」(Novoye Vremya)である。この新聞は記事は精鍊されてゐるが、然かし全然無主義である。佛蘭西の「フィガロ」を真



似て、事業家肌の文人スボリンが發行してゐる。彼は、文學も亦時勢の必要上その柱脚から降りて、他の物品と同様需要供給の法則に従はなければならぬ、それは決して恥でないといふことを公然宣言したので有名に成つた。で、この主義に據て、『新時代』は風のまにまに漂つた。鋭い面白い調子で、極く短日月の間に掌を翻すやうに、同じ事件同じ人物を攻撃したり辯護したりする。この新聞は尊敬されるよりも寧ろ面白がつて讀まれる。かやうな性質から一流の地歩を占めることは能きなんだ。其政治上の勢力も皆無である。

スボリンはこの新聞のほかに莫斯科で大きな出版所を有つてゐたので、彼の文學上の勢力は自然尠なく無かつた。多くの若い進歩主義の作家が彼の立場には不賛成でありながら、たい報酬をうる爲めに、つひ自分の弱點に乗つてその賣行の好い紙面へ彼等の論文や小説を寄稿した。スボリンは廣告の爲めには何んな費用をも惜まなんだ。で、あらゆる歐羅巴の大都市に代理店を置いて、電報を利用し

て『新時代』が是々の問題に就てかくくの議論をしたと云ふことを吹聴せしめた。——聖彼得堡では犬が吠え風が嘯る程にもない事件でも、その爲め外國では何か重大の事のやうに考へられた。

その記者の一人のBに就て、嘗て聖彼得堡で講演を開いたことのある外國の一著作家が次のやうな話を談つた。『私がまだ故國にゐる頃からBは私に宛て二三度手紙を呉れた。一冊の書物を送つて來たこともある。それから私が聖彼得堡へ行つた節は彼自身と『新時代』は何んな御便宜をも計ると言つて寄越した。で、私がその土地に着くと直ぐ彼は訪問に來て、私をその家へ招待した。いかにも熱心な調子で以て、毎日私の爲めにその食卓に食事を用意して置くからとまで言つた。私の第一回の講演が評判の好い話をして、彼がその記事を書く参考に私の草稿を貸すやうに頼んだ。彼は幾度も來て、何卒かその妻に買物のお伴をさして呉れりと獎めた。その態度が如何にも媚び諂ふやうなので、私は嫌な心持がした。それ



から私は少し遁腰になつた。で、その次訪問を受けた際、今日は都合が悪いから妻君の御伴は出来ませんと断つた所が、彼は前とは打つて變て、その日の夕刊に私に關する思ひ切つて大膽な攻撃の記事を掲げた。彼は長く沈黙を守つて、世間の氣受を窺つてゐた。然かし、遂にその學才と思索力の卑しむべき缺乏を暴露した。と。で、私の講演の一部が検閲官から突戻された爲め、據所なく私が嘗て某所で演つた舊稿で露西亞では未だ知れてゐない物をその代りに使つた事情を彼は能く知悉してゐながら、私に獨創力の全く缺けてゐることやら、舊い知れ渡つた談義を繰返すことやらを擧げて主に攻撃した。露西亞の公衆と雖も彼の考へてゐる程の間拔でも無學でもない。恚う彼は附加へた。恚様な場合外國人は我等を愚物扱ひにして、我等の衣囊に手を突込むのだ」と。

その人は更に恚う言つた。「他の邦の新聞に就て充分經驗のある人でも、文筆の生活を送る者の必ず出逢つたことのある驚きを解してゐる人でも、聖彼得堡の或

る特種な新聞紙の破廉耻と腐敗には一驚を喫せざるを得ない。」

莫斯科には、聖彼得堡と同じく、二大新聞が在る。その一つは自由主義の「露西亞タイムス」(Ruskiya Yedomosti)で、文章も立派なら、露西亞中でも一番尊敬すべき新聞である。編輯者はソボレブスキーと言ふ舊大學教授で、沈着方正な、元氣強い科學者である。この新聞は三萬人の購讀者を有ち露西亞では恐らく一番に賣行の好いものだ。之に次では、西歐に能く知れ渡つてゐる「莫斯科タイムス」(Moskovskiya Yedomosti)がある、是は故カトコフの機關紙であつた。

カトコフと云ふ男は餘り學問もなく、書籍も碌々讀まないほどの男であつた。その晩年に近い二十年間と云ふものは、彼は一冊も書籍を手にしたことがなかつた。露化主義の鼓吹の爲めに彼は別に讀んだり考へたりする必要に迫られななだ。それでゐて、彼の文章は堂々たるものであつた。散文を書く文章家のうちでは一流を占めてゐた。彼の新聞は餘り多くの讀者を有たななだ。彼はたゞ唯一の



讀者——一部でも読み缺かしたことの無い——皇帝亞歷三世陛下を目標として書いた。で、政府の命令で無理に購読させられた讀者もあつた。あらゆる學會、學校、宮庭などはこの新聞を補佐する義務を負はされてゐた。

カトコフが死んだ後で、遺産の情態が世の中に知れ渡つたとき、彼の盛名はその大部分を失墜した。彼は驚くべき巨萬の財産を遺して置いた。それは彼が莫斯科の豪商達から奪つたものよりほか解釋が能きなんだ。實際、カトコフは關稅の低減に反對して彼等と迎合したのである。皇帝でさへ、彼が生前國法を潜つてその財産を隠蔽し、相続税を誤魔化したことを不快に思はれた。

『莫斯科タイムス』は今もまだ發行してゐるが、全然その勢力を墜して了つた。その他に、近頃同じやうな目的で起つた一つの新聞がある。『市民』(Гражданин)が週刊から日刊に直つた。噂に據ると政府から尠なからぬ補助を受けることになつてゐるさうだ。編輯者は、通俗小説で名高い保守派のメシユチエルスキーと

決定つて、カトコフの新聞と同じ主旨のもとに、思ひ切つた卑俗な物にするのださうだ。

露西亞では他の邦よりか雑誌が大きな勢力を有つてゐる。なせかと言ふに、檢閱官の小心で、單行本では許されないやうな材料でも雑誌には認可してある。それでも過去の十年間に『ディエロ』のやうな幾多の立派な評論雑誌が禁止された。この邦では非常に浩漭な雑誌が月々幾つも出てゐる。

そのうち最も知れてゐるのは『歐洲通信』(Vestnik Yevropi)であるが、主幹のスタスレウイチと言ふは六十近い頑丈な修養の深い老人で、舊は大學教授をしてゐたが、今は經濟と衛生の問題に没頭して、聖彼得堡の河水の改良と云ふやうなことを研究してゐる。其雑誌は純正な自由主義の機關で、七千部賣れてゐる。ゴンチャロフとアルセニエフの二大文豪がその寄書家に成つてゐるが、前者は目下自分の傳記を公にし、後者は青年に忠實な科學的批評を掲げてゐる。それからこ



の雑誌は有名な文學史家のビビンやスバツグイッチのゐる團隊に依る所が多い。スバツグイッチの事は前に書いて置いた。ビビンは素とチエルヌイシエブスキー黨の一人として、急進派と目されてゐたが、『スラブ民族文學史』の著者と言ふ所で告發だけは免れた。その著には、検閲官の壓迫が到る所微見えるけれど、生存に對する智的闘争の深く眞實な解説と與に、各種のスラブ民族の文學的所産が詳らかに紹介されてゐる。その他に有名な辯護士で且つ公法家たるコニー及びウチンの二人が矢張『歐洲通信』を補佐してゐた。前者は『罪の解剖者』としてのドストイエブスキー』と言ふ論文で名を知られ、後者は『ブルガリアから』と言ふ標題の文章を續けてこの雑誌に寄書してゐた。その後それが一冊の書籍になる時に禁止された。

聖彼得堡のこの雑誌と並んで、莫斯科にゴルチエフの主幹する『露西亞思想』(Russkaya Mysl)がある。之は『露西亞タイムス』と同じ主義のもとに立つてゐる。

て、その新聞の寄書家達に佐けられ、一萬の購讀者を有つてゐる。

その他に四千八百人の讀者を有つ『北方通信』(Sverni Vestnik)と言ふ雑誌がある。ミス、エブレイブナと言ふ貴女の出してゐる物で、今までは一番活潑な一番近代的な物であつたが、勢力のある名高い批評家のミケイロブスキーがそれと離れたので、大打撃を受けた。この雑誌の寄書家は皆な進歩的の意見を持つた人達である所から、政府に睨まれて、厳しく檢閲されてゐる。持主のミス、エブレイブナは年齢は四十代で、厳格な顔付をした髪の毛の灰色な女である。彼女は數年間、モンテネグロに近いアドリアチック海の岸邊に滞在して、舊いスラブ民族の生活を研究し、古代スラブ語で書かれた文書を模寫して出版したことがある。其事業の爲めに彼女は私財を蕩盡した揚句、生活の手段として『北方通信』を發行することになつた。

この雑誌の寄書家には主に呑氣な文學上の浮浪人が集つてゐた。露西亞の彼様



な徒輩には、どん底まで貧乏して、食ふや食はずに、借金で首の回らない連中が多かつた。そして老人の者は大概不幸な結婚をしてゐた。彼等は世の中から全く懸け離れて自分達の世界にばかり住つてゐた——何人も是に到て悲惨な者ばかりで、酒には泥む、多年の不幸と追放の爲めに常識を缺くやうになつた。然かし、その中にも不撓の體力と健全な精神を以て、文學的生活や追放生活の勞苦にも屈げずに、世の風波を渡り來つた數人の秀でた著者があつた。

ブラトポポフはその一人である。彼は以前『我等が祖國の編年誌』に寄稿して、異常な才能と活氣を現はしてゐたが、その後追放され、今は再び歸つてゐる。コロレンコオもその一人である。彼は廣い肩と小供らしい容貌をしてヤクツクの追放地から歸つて來た。ガルシンも其一人である。この人は時々狂癡病に襲はれたが、それでも幾冊かの纖巧で大膽な小説を書いてゐる。彼は非常にトルストイに私淑してゐたが、然かしその性急な厭世主義には彼獨特の個性がある。それから、

頭目のミケエロブスキー自身もその一人であつた。彼の文體は稍やザルチコフの諷刺調を模し、その批評は大膽詭計で、豊富ならざる學力を蔽ふに縦横の才を以てした。次にズラトブラツキーがある。この人は好く理想的農夫の事ばかり書いてゐるが、彼自身貧しい農夫の勞働者その儘で、數多い小供をかゝえながら、ヨブのやうに貧乏してゐる。またアルコール中毒にかゝつてゐて、獨りで戶外へ出ることもできないやうな爲體だ。最後に偉大な輝いた才能を有つたグリエブ、ウスペンスキーがある。彼は實に有爲な青年から使徒と仰がれてゐる。不幸にして彼も亦聖彼得堡の居酒屋の吊床で一日の六七時間も費すやうに成下つたが、然しその不規則な生活のために社會の領分外に出るほどには傷けられなんだ。彼が今日まで書いた物は唯だ短篇小説のみであるが、それでも既に大部の書冊を爲してゐる。彼が昨今小説や論文で描くものは勞働社會の女性のことはかりだ。彼は片時も自分の腦裡を去らない一つの思想を反覆し説明してゐる。斯様な勞働世界



の女は母たる権利が無い、なせなら其子を養ふことができないからと、憊う彼は考へてゐる。で、彼は工場内の腐廢した道徳やら、身を錯つた女の上に落ち懸る耻辱やらを描くと同時に、特に斯様な女達の爲めにも讀物を書いて、生れる小供の利益を思ふなら母になるなど云ふことを奨めてゐる。

グリエブ、ウスベンスキーは生粹な文學者の浮浪人である。彼は平氣で金銭を借りたり貰つたりして歩く。で、或る金銭の要る人に出遇ふと、自分の持つてゐる全部或はより以上を其人に與らずに濟すことが能きなんだ。なせなら彼は他人から借りてまで恵んだ。それでも彼が多數の人から尊敬せられてゐる爲めに、彼の不節操を責める者も無かつた。「グリエブの事だから致方がない」憊う言つて黙許された。

以上述べたやうな四五の秀でた人を除いては、一體に露西亞の著作家は、青年でも老人でも、泥酒の癖をもち、金錢問題には不始末で、修養をも缺いてゐ、毎

日物臭い沈鬱な生活を送つてゐる。或る者は麥酒とシャンパンと女に耽溺して、定まつた家庭さへ持たない。自由と幸福とに達すべき凡らゆる希望の失墜、人生の限りない不幸の感想、國家や人民の爲めに盡すべき手段の閉鎖——是等のものが彼等を驅つて絶望の淵に陥れ、その絶望を忘れる爲めに強て彼等をして無自覺の生活を求めしめるやうになつた。

勿論是等の作家は極く狭い社界しか知らない。またその修養も至て限られてゐる。で、上流社會に知己が無いばかりか、一種の猜疑心から自ら高く止まつてゐるために、上流の者も彼等を知らずに了ふ。聖彼得堡の實際社會で彼等の位置は丁度新平民のやうなものだ。一番好い所で彼等の著作の名が知られてゐる位だ。個人としての作家は優雅な紳士淑女の間には通つてゐない。

その中の最も知名な老人でもが、矢張社會から懸け離れた生活をしてゐる。で、其仲間の妻君と來たら、また必ず自分の夫を了解しない手合ばかりで、男の方は



厭々ながら同棲してゐる向が多い。それでも御亭主は性質が好いから大概な譲歩はする。嘗て一人の親しい友達が或る知名な老作家に慫う言つて尋ねた。「なせ彼んな馬鹿な女が男を腎に敷くことが能きものだらう」。『馬鹿な女だからさ』、慫うその人は答へた。「有爲な男は免ても女の痴愚には克てやうがない。煩さがらせる、乗る、くどい、止度がないと來てゐるから。若しそれが愛らしい賢明な女だつたら決して亭主を腎に敷くやうなことはあるまい。』

進歩的露西亞の作者で最も人氣のある老諷刺家のザルチコフが、今や痛風を病んで頻死の床に就いてゐる。作物の中に含まれた眞の詩趣よりもその傾向を重んずる讀者にとつては、彼はトルストイ以上の作家に觀られてゐる。現在生きてゐる作者のうちで、散文の中に最も巧妙に諷刺を用ゐた者は、疑もなく彼である。要するに彼は境遇が自然に生んだ産物である。一方では彼のやうに正義と平和な自由に対して情熱を持ち、他方では現政府を相手にする者が、今代に處する態度

は必然的に農夫の性質を帯びなければならない。然かし、何たる農夫であらう！試みに彼の作『我等がボンバドール』を讀むが宜い。

然かし今ではその言葉の意味が大分轉用されて、日常の會話に『ボンバドール』は妻君の腎に敷かれる夫を表はすことになつてゐる。ザルチコフの作物には斯様な種類の田舎知事が一ダースも現てくる。

彼の描寫法を覗ふ一例として次の會話を擧げる。ある縣廳の書記が朝、役所で上官に遇ふと、『おい、僕等の仲間で罷められた者があるが知つてゐるか』——

「閣下、誰だと被仰るのですか」——「誰だと？勿論あの可愛いボンバドールさ」

——「この答を聞くと私の心臓の鼓動は急に停まつた」慫う書記は話してゐる。

「が、暫くして徐々に脈搏も復つてくると、私は考へた、首だけは取止めなくちや

ならないと」——「閣下、その後任は何人が御存じですか」——「何とかキューダリン

と言ふのだ」——「將軍ですか」(譯者曰、露西亞には武官に將軍のあるやうに文官



にも將軍がある)——「左様、將軍だ」——「奈何んな方でしやうか」——「哺乳動物さ」——「そこで、私達は二人とも考へ込んだ」——「憊う書記が言ひ續けた。『私は早速街へ出て、其處に立つてゐた百性供にこの報知を聞かした。』お前達は未だ知るまいが、ユーフィモフ閣下は既う我々の知事じやないぞ」——「ははあ、それが何うした」ある百性が憊んな答をするやせずに、私は彼の頬邊をうんと云ふ程擲つた。「然かし新しい人が来るじやありませんか、新しい人が」憊う言つて百性は謝まつたが、私は無中でなほ擲り續けた。が、その中にふと「新しい人が来る」と云ふ言葉が、露のやうに私の心に落ちた。それが私には何よりの慰藉だつた。私はその百性に拾コヘク遣つた。」

ザルチコフの諷刺の最も得意な題目は、露西亞でのみ流行る保護制度だ。もしその邦の高官に知己を有つてゐれば、何んな保護でも受けることが能きる。私の知つてゐる聖彼得堡の或る家族は南露西亞に下る爲めに、わざ／＼オレルから

あらゆる客車を取寄せて、田舎の家の前へ汽車を横附にさせたことがある。私にも憊んな事があつた。或時スモレンスクの停車場に着くと、わざ／＼私の爲めに寢床まで供付けた特別の客車が用意へてあつた。驛長の所へ上官から命令があつたのだと謂ふ。で、私が遠慮したにも關らず、車内の乗客は皆下されて了つた。「別に貴君が何も被仰やることはありません、憊う驛長が言つた。『この中には切符を買つて乗つた者は一人も無いのです。』實際、側の者に聞いて見ると、確かに然うだつた。で、私はより低い上官から保護を得てゐる連中の權利を冒しただけで済んだ。今一つザルチコフの得意な題目は賂賂であつた。露西亞では官吏の教育の低いのと給料の安いために賂賂が横行する。この邦の官吏は奈何うしても下賤な位地から鰥上に上らなければならぬ。彼等の意氣地なしで根性の卑しいのは一つはそれが爲めだ。よく憊んな話を聞くことがある。『私の叔父は將軍だが、中風の爲めに元老院へ入つた。彼の人は眼が盲れたから立法院の議員になれ



た。若し彼が今一つ何か不幸な目に逢つたら大臣になれたらう』で、官吏の俸給の安いことが抑も收賂の原因だ。彼等に酒料を送ることは丁度他國で僧侶に報酬を出すことのやうに思はれてゐる。一番劇いのは官吏と公金との關係だ。斯う云ふことから、次のやうな露西亞の諺が出て來た。『基督よりほかの者は皆盜人だ』と『否や基督だつて十字架に手を釘附にされなんだら盜むだらう』、愆んな不敬な事まで言ひ添された。また『お前が官吏と相談があるなら金錢の話をしてなけりやならない』と云ふ諺もある。然かし斯様な習慣は一方にはまた便宜なこともある。なせなら、官吏の不徳のために他の手段では兎ても得られない自由——寛容、無辜の放免、人間や書物の自由通行權——を得られるからだ。

斯様な行政事情は必然的にザルチコフのやうな諷刺的滑稽的な態度を産むべきである。之を同時代の波蘭の作家の諷刺と較べると、波蘭人のは何時も反宣教師的で、非愛國の分子が入ると讀者に對する効果を減するのであるが、露西亞人の

は直截で、丁度オヂシアスがサイクロプスの眼へ突込んだ鎗のやうに、露出しの刃先が鋭く光つてゐる。

新聞紙や雑誌の名高い寄稿家の事は以上で述べ盡した。次に來るのは批評、歴史、哲學、人性學などの著作家である——是等の人の學問は先づ誤魔化しのない方で、文章は稍や學者臭く、一樣に神彩を缺いてゐる。

この邦の歴史家、法律家、批評家などの間には、初對面の外國人に次のやうな印象を與へる者が多い。即ち彼等は一時代前の獨逸の學者を臆ひ起させる。堅固で、眞面目で、稍や重苦しい所がある。で、露西亞でも言語學者だけは獨逸の學者のやうに學問に食傷した嫌ひはあるが、この邦の學者は一般に實用的形式でその思想を飾つてゐる特色がある。彼等には、私が嘗て獨逸の老言語學者フライシエルに見たやうな、七十にして猶且赤い頬と輝いた青い眼を有つた小供らしい無邪氣さは見當らない。然かし彼等——殊に小露西亞人——は寛裕で、褐色の頬の



上の深い笑厩で笑ふお人好しの所と、惻口な婦人のやうな放逸の所とがある。彼等は清い純潔な修養から出た謙遜心を有してゐる。獨逸人は常に——多少の理由はあるが——獨逸の學問を先天的に優れてゐるものと自惚てゐるが、露西亞人は屢々他國の研究や知識を自分達のものより尊敬する。彼等の知識の深くなるほど自國の學問の發達に就いて不満なく思ふ。

露西亞の學者や著作家の間には偉大な獨創力を有した人がある。それ等の人身が、如何にこの邦の制度のもとで多くの獨創力が壓伏されるてゐるかの生きた證據である。自然科學者のミクルホ、マクレーはその一人である。

彼は唯だに優れた人類學者であるばかりでなく、彼の名を冠したオーストラリアの一島の王である。彼はその大著を出版する爲めに、シドニーで娶つた英吉利人の細君を連れて、聖彼得堡へ歸つて來た。マクレーはその島の帝王として百四十七人の土人を細君にする權利を持てゐる。然かし彼はその權利を利用せなん

ださうな。彼は頭の巨きい、若々しい眼付をした、頭髮の白い、五十恰好の立派な人柄だが、劇しい痛風に惱まされて、終日鹿の毛皮の上に寝そべつてゐる。それで自分の永住地としては『マクレー』島とその周圍にある『幸福の人の島々』ばかりを思つてゐた。

この人に關する次の逸話は純粹な露西亞人氣質を現はしてゐる。彼の机上には何時も婦人の頭蓋骨から作つた一つの洋燈が置いてある。彼はまた青年の頃には醫學を勉強してゐた。で、その頃ある病院で看護したことのある妙齡の一人婦人と互に戀し合つた。彼の机上の洋燈は即ちその婦人の形見で、骸骨の上に油壺が戴りその上に綠色の傘が被せてある。世界の何の際邊へ行かうと彼はこの燈洋の光で仕事をするのである。昔の戀人の寫真よりも骸骨に思を殘す所、その紀念品の使用法を考へ當てた所は、恐らく露西亞的で、風變りな英國人ですら此處までは思ひ付くまい。



マクレーは時の外務大臣を酷く忌み嫌つてゐた。彼は永い間自分の島に露西亞の國旗を掲げることが嘆願したが許されなうだ。然るにある時ピスマルクが獨逸の國旗を其島に樹てたので、マクレーはその事を外務大臣に打電した所が、恚う云ふ返事が来た。「余は汝を保護すべし、但し暴行を爲す勿れ」と。恰も彼が其島の未開な土人を率ひて獨逸の艦隊に抵抗でもするかのやうに。で、マクレーはその時から獨逸の臣民になつて了つた。

この邦の科學や文學で著名な他の人達を見ても、その人の天才が矢張一種の癖のやうに化つて現はれてゐる。トルストイに於て如何にそれが雄大な形をとつたかは能く人の知る所であるが、然かし彼の場合は、是も人の知る如く、宗教的動機が手傳つてゐた。老ゴンチャロフに於ては、之と反對で、彼がまだ若い頃の傑作『オプロモフ』を書いたさき、幾年か思想が枯渇してゐた爲めに、且つは彼が世間から持擯されてその女々しい根性を増長させた爲めに、偏癖が嵩して他人

との交際さへ能きないほどになつた。

ある冬彼は別戀な人の家で自分の小説の朗讀會を開いた。然るにその席に彼のまだ見覚えのない一婦人が列なつたと云ふので、非常に激昂して、その會を中止して了つた。たとへ其人が若くても美しくても、未見の人の顔と云ふだけで、彼の精神を錯亂させるに充分だ。今一つ次の話は、彼の癩癖はその奥に窃む純露西亞式の粗野性の發露であると云ふことを示してゐる。嘗て彼とツルゲーネフとは同じやうな結構の小説を考へてゐて、互に話し合つてゐたが、ツルゲーネフが先づそれを公にした『貴族の家』がそれである。然るにゴンチャロフは其小説を讀んで、眞赤になつて怒り出した。で、ツルゲーネフと街で逢ふや否や、『盜賊待て、盜賊待て』と叫つて跡を追掛けたことがある。今でも彼はツルゲーネフの名が出る時、泡を吹いて怒り出す。

露西亞の新聞紙や雜誌が公衆に與へる感化の如何は容易に知ることが能きな



い。讀者がちらばらばらに擴がつてゐるので、他國の讀書社界に於けるやうに所謂『民の聲』を通して告白を得たり試験をしたりすることが難かしい。それでもいろいろの事から恂う云ふ斷定が下せる。この邦の讀者は到て從順で、偏見がなく、感動を與へ易いので、西歐諸國の讀者のやうに記事に對して満足の評價をすることはできないが、之を受け納れる力は確かに大きい。殊に女流社界の熱心は一層強い。田舎町では屢はこの特色の戯畫が見られる。私は曾てオレル地方から來た、『未だ若い』厚化粧をした一貴女を見たことがある。彼女は其地方では文學上の聖現として通つてゐるのであるが、恐ろしくリケパンの崇拜者で、大膽に次の句まで引用した。

L'amour gue je Sens, l'amour qui me euit,

Ce nest pas l'amour chaste et platonique,

Sorbet à la neige, etc,

(わしの味ふ戀は、わしな養ふ戀は、

無垢なプラトニックなものでもない

雪のやうに白いものでもない)

これは實際好い句で、それだけで見ると決して卑近な趣味とは言へないが、然かしこの人には至極不似合であつた。また私の見たカールコフの老貴女は、彼女自身の説に據ると、その地方での趣味の中心であつて、人民の爲めに露西亞文學の傑作の朗讀會を開いてゐた。自分でも作をした。聲の高い、喧ましい女で、苟も印刷になつたものは何でも知つてゐた——手足の爪先まで文學的であつた。

スラブ民族の間では詩人なり著作家なりに對する尊敬の念は一般に他國に於けるよりも篤く、一女性をして生涯彼を崇拜せしむるやうなことは屢は在る。ある貴女が二十年間變らずバルザックと文通を續けてゐたなどと云ふのも決して偶然ではない。彼女は波蘭の有名なルゼウスキー家の令嬢のハンスカで、其後遂々彼



と結婚した。

現在聖彼得堡で高い家柄の貴女がその夫と家庭を棄てて詩人ナドソンと墮落をした。彼はその時既う半死の情態であつたので、彼女はその最期まで面倒をみた。で、今でも彼の思出とその人の名譽を樂んで暮してゐる。彼女が詩人に對する思慕と崇拜の念は彼の死後殘酷に弄ばれた觀はあるが、それで觀ても如何にこの邦の文學的情熱には強い信念が籠つてゐるかを窺ふことが能きる。

それは斯うである。ナドソンの友達の一婦人が詩人の死後數ヶ月経つてから、彼と高貴な貴女で無名の伯爵夫人との間に取交はされた面白い文通を公にした。この婦人はそれで一度も彼に會つたことが無かつた。婦人の方の手紙は優雅ではあつたが仰々しかつた。いろ／＼總合して考へるに、この婦人はまだ若くて奇麗で、貴族的に教育された人で、結婚後間も無くゐたのが、ナドソンの詩を讀み其寫眞をみてから、見ぬ戀をしたらしい。手紙の往復は七ヶ月間續いた。彼女

の文は情熱の熾んなもので、それが段々劇しくなつた。然るにナドソンの方はやさしい文句もあるが、沈着してゐて比較的冷やかであつた。が、彼にしてもこの俟ち設けない奇妙な戀には尠なからず動かされたらしい。左右するうち詩人は逝くなつたが、この書の編修者の序に依ると、件の文の主も遠からず其跡を追つた。で、臨終の際に其夫から、詩人が彼女に送つた手紙ばかりでなく彼女自身が書いたものをも公にすることを許すと云ふ誓を得て瞑目した。

この書簡集は長い間露西亞の讀書社界の注意と同情の的になつた。然かし、あの一新聞が疑を懸けたやうに、詩人もその貴女も皆んな大膽な捏造の犠牲であつたことが譯つた。よし編修者の動機が物を神秘化する性質から面白半分に出たにしろ、或は唯だ無謀な空想狂から出たにしろ、そんな事は左程必要でない。要するに露西亞の公衆が外貌に關係のない斯様な情熱を異常とも無稽とも思つてゐない所が注意すべき顯象だ。



思想の高調な文學的情熱に陥り易いこの邦の青年間では、これよりも著しいや

うな事件が屢々起る。私の考へではこの現象は露西亞人殊に教育をうけた者の間に感情生活の方面を發達させ様とする傾向を異常に有してゐる人達のあると云ふ事實と符合してゐる。實生活や文學から觀察するにこれ等の露西亞人は現代の他國人よりも深く愛し深く敬ふと云ふ素質を有してゐる。この邦のうら若い青年はその愛する女から心靈上の援助や濟度を得やうとさへする。また戀する老人は忍耐深い尊敬を女に拂つて自己の缺陷を充たさうとする。下級の遊牧民を驅つていろ／＼の宗旨や神秘教に趣かしむるのも斯様な崇拜癖からである。で、是が文學に於ては微妙な受感性となつて現れる。

その邦の範士の廣いにも關らず、作家の受くる報酬は到て尠ない。今の所筆だけで飯の食へるのは二大詩人と節操のない記者だけだ。然かしもつと深い意味から言へば、自分の感情、思想を記事、論説、または大きな書籍で公にする時に、

一番貴い報酬を受けるのはこの邦の作家だ。彼等は多數の讀者から親切に理解せられ、何の邦でも見られないほどの熱心と尊敬を以て評價されるのである。

露西亞では苟も燃ゆるやうな知識上の渴を醫するに足るものは、何んなものでも、乾いた土の上に落つる露のやうに吸収される。



私達はある時、ジブシイの歌舞を観る爲めに、莫斯科郊外の大きな料理屋へ行つたことがある。一人の會長が先達になり、一族の男どもに伴れられて、彼等は多勢で晚餐の席に遣つて來た。そして疎野な、驚くべきほど調の高い歌を謡つた。また或る若い娘達が踊つて見せて呉れた。その踊は些しも歐羅巴風の所のないもので、机と椅子の間の狭い四角な場所でも出来る。なせなら、静止の姿勢で、たい身體中の筋肉を動かすだけだからだ。恁様に限られた場所での旋風のやうなこの戯劇は亞細亞風または亞非利加風と謂へる。之に反し露西亞人の喜ぶその歌には、野蠻の調は帯びてゐても、ジブシイ獨特の所が尠ない。二三の歌調は或は眞にジブシイの音かも知れないが、その多くは實は露西亞の俗謡で、ジブシイが

それを味つて自分のものに爲たに過ぎない。彼等の謠ふ詞も露西亞語だ。之は明かに斯う云ふ事を示してゐる。露西亞の百姓の音樂の趣味と、その俗謡の詩的な特性が知らずくの間に、外面の影響には些しも感じのないこの頑な異人種の心に烙印を捺したのだ。で、露西亞人がジブシイから自分達と異つた不思議な新奇なものを探めるのは、實は尠ならず自分自身を索してゐるのだ。

この怪奇な歌と踊を見て、私はふと前のやうな考を起した。で、それを語り出した時に、會話ははこばれて、建築や塑像に就ての露西亞人特有な點、その同化力などに及んだ。それが種々の思想を呼び起す種となつて、一年後の今日、私をして過古現在の露西亞の藝術の獨創性に就て次のやうな話を爲せるまでにした。露西亞人は最初建築術でその獨創を發揮した。スカンデナヴィア人は昔の丸太作りの小舎を建てるに樹を刻んで用ゐたが、露西亞人は丸太を一本々々横に列べて外側で搏り附けて壁を作つた。然しその丸太小舎がビザンチン風の建築術に似て



あるからと云つて、直ぐに彼等がそれを真似たものと速断してはいけない。露西亞人がビザンチン風の寺院を作り始めたのは十八世紀から後のことだ。その時でも彼等は其れに亞細亞風またはスラブ風の裝飾を施してゐた。

昔の聖徒を現はした宗教上の偶像を見ると、露西亞は全然ビザンチン化してゐる。この點に於ては他の東歐の希臘加特利教の邦々と差別がない。然かし、宗教上の建築物になると、純粹のビザンチン風とは明かに違つてゐた。細長くすらりとしてゐて、成るべく高く天に朝するやうに出来てゐる。

十二世紀の終には、露西亞の美術は西歐またはビザンチンに比して劣つてはゐなかつた。その頃の露西亞の手藝家は金屬細工にかけては、廣く世界に知れ渡つてゐたほど上手であつた。十三世紀の中頃、佛蘭西の使者が彼等を捜して韃靼蒙古人の配下にあるのを見付け出した。嘗て路易王がシブラスから、その當時露西亞の大部分を司配してゐた韃靼の大カーンに特使を立てたことがある。その時も

露西亞の建築家と佛蘭西の鍛工とが彼の下で働いてゐるのを見た。また一二四六年には、ド、ブラン、カルピンがインノーセント四世の使者になつて大カーン、ガジュツクの所へ往つたが、その時の紀行に、彼は韃靼宮庭の華美と豪華なことを説き、カーンの寵臣であつた露西亞の鍛工が、象牙で玉座を作り、之を金や寶石で飾り立て、浮彫さへしてあるのを見たと書いてゐる。

韃靼人は長い間露西亞を支配してゐたが、彼等がその土地の人民の美術上の趣向や型を變えさせたとは思はれない。遊牧の民であつた韃靼人には彼等獨特の美術上の風尚などは無かつた。従て金さへ捲上げてゐれば、露西亞人に關ふ必要もなかつたのだ。然かし、韃靼のカーンが美術趣味を持つた亞細亞人と露西亞人との間の橋渡しを爲たことは争はれない事實である。彼等の下に働いてゐた露西亞人は、自分達に珍らしい亞細亞本土の美術を深く見極めて、それを覚えて歸つて來た。一二四七年に、露西亞人の英雄で聖人であつたアレキサンダー、ネブス



キーが、瑞典と獨逸で大捷して歸つてから、全盛の遊牧民の軍營に伺候し、そこから軍功により自分達の奴隸状態の輕減と緩和を希ふ爲めに大カーンの所まで行つたことがある。その旅行は二年懸つた。で、何んなに種々の點で二つの宮庭の間に類似があるかを見て歸つたと云ふことである。

ピオレ、ル、ダツクは露西亞の美術に關する著作の中で、マルコ、ボロの詞を引いてゐるが、私は深くそれに感心した。マルコ、ボロは有名なベネチアの旅行家で、はじめて（十三世紀に）亞細亞を旅行し紀述した歐羅巴人である。その説に據ると、鍍金し着色した金屬張の圓頂閣や、雑色の天井や、色の濃い壁などで露西亞の建築が何れだけ東方亞細亞の影響をうけてゐるかが分ると云ふてある。猶彼はカンバルの都にあつた大カーンの宮殿を叙して次のやうに書いてゐる。

この宮殿は六千人以上の人間を容れるだけ大きく去く出來てゐる。其處にある部屋の数多きはまた一つの奇蹟だ、實際この宮殿の宏大で美麗なものは、世界で誰もより以上のものを望みまたはより以

上の物を造り上げるとの能ない程だ。その屋根は朱や青や黄のいろ／＼の色の玻璃で張詰であつて餘程遠くからでも輝いて観えるぐらゐ、水晶のやうに光澤が出してゐる。で、その屋根がまた丈夫で幾百年も支えるやうに出來てゐる。

ストロゴノフやマルチノフのやうな露西亞の學者は、その邦の建築と裝飾術に及ぼした韃靼や印度の影響に就てのピオレ、ル、ダツクの説に極力反對してゐるが、私の考へでは、露西亞の建築術が殆んど凡て東洋から借りて來た分子で成立つてゐると云ふ彼の説の方が正しいのである。

露西亞の藝術は根本から宗教的だ。なせなら露西亞では（波蘭のやうに）宗教的情緒と父國及び故郷にたいする愛とが融け合つてゐるからである。僧侶は人民のこゝろが宗教から離れないやうに努力する。で、普通の人民が書讀の能きない所から、宗教上の繪畫を一種の象形文字として使つた。またその文字が何時の代にも理解されるやうにする爲めに、些しでもその形を變えなかつた。聖像は、後世



の國旗のやうに、國民的標章として尊敬せられ、變えられなかつた。それには古代の勇悍な男子の理想としてゐた、沈着な、瘡せた、遁世的の人物が、長い衣物を着て現はされてゐた。

然かし露西亞の藝術の沈滞してゐたのは斯の方面ばかりであつた。殊にコンスタンチノープルが最早基督教の都でなくなり、土耳其人の有に歸してから、露西亞人は藝術の様式を其處に求めなくなつて、十四世紀には彼等の獨創力を發揮することが最も熾んであつた。自國の材料を注意して使ひながら、その需用に應ずるやうな寺院や住宅を造つた。或は鞣皮を製して之を飾り、また自分の趣向に適ふやうな織物を織つて之に縫取をしたりした。丁度その帝國の統一の出來た頃から、彼等の藝術的製作も様式が定まつて來た。

彼等はなるべく華麗な、露西亞の國民的特性を現はしてゐる堂宇をその寺院に附けた。それはその大きさと頂上の目立つた輪廓とで人の注意を招ぶやうに出來て

ゐる。彼等はまた中央の圓頂閣の周圍にいくつもの圓頂閣で頭を作つた。それ等が丁度塔のやうな形になつて、その上に鍍金をしたりまたは着色した精工な球が乗つて、球の上は鎖で互に結びつけられた十字架になつてゐる。寺院の壁は煉瓦で包んであつて、その瓦の表面にはいろいろの型や畫が焼付けられ、燦然した派手な敷物のやうな感じを興える。際立つた色は赤、白、緑などで、殊に緑は屋根の上の球に能く使つてゐる。

鞣靴人の治下を脱する頃から、マスコバイト人は早く甲冑師、金銀の彫刻師として其才能を發揮してゐた。彼等はまた到る所の隣國に縫取した亞麻布や細工を施した鞣皮を輸出した。彼等の縫取は、その古代の記録本の表紙のやうに、着色の調和を以て優れてゐる。總じて彼等は形體の美よりも色の調和の方に鋭い感じを有つてゐた。で、畫家としての彼等の規範は、創造力よりも寧ろ忠實を重んじてゐたので、その肖像のビザンチン風の不自然や、生命のない素畫を飾り隠す



ために、邊額を金や寶石で飾つて、一種の派出な裝飾にして丁つた。それから、彼等は變つた嗜好を出すことも能はず、聖像の頭や顔に新しい試みをする譯にも行かないので、たゞその頭へ寶石を鑲ばめた金の後光を廻らして見たり、肖像の胸をびかしくした金銀の板で飾つて見たりした。十六世紀に作られた其の頭光や胸板のなかには、金の板に小さな綠葉と小さな青い花を鑲めた物、白い線のかなかに濃淡の異つた綠をあやなした物、たゞ金のなかに一つの小さな黒い葉と黒い輪廓を入れた物などがあつて、非常に美しく、何とも形容のできないほど愛らしく人を蕩かすやうなのがある。

樹の丸太で造つた普通の住宅は瑞西や諾威の建築法に能く似てゐるが、是は使つた材料が同じ物であるために従て同じやうな形式を生んだまでで、特に露西亞的の所も判然と見別けがつく。で、彼得大帝以前から露西亞は充分にその特性を發揮してゐたと言ふことが能ざる。その後續いて起つた外國文明の侵入は、その

特性に有利であつたとは言へないが、たゞその發達を後らしただけで、恚様にして十九世紀にその國民的精神が他の方面と同じやうに藝術上でも新しい發足を試みるに到つたのだ。

露西亞へ初めて繪畫の術の這入つたのは十九世紀からである。カザリナ女皇は「ハーミッテージ」博物館にいろ／＼の繪を集めた。それから、他の邦々のやうに其國にも美術家を作る爲めに美術院を起した。然かし彼等は自分で描いた物を決して賣らなんだ。その時代の金持の露西亞人は皆な外國の繪ばかり買つた。美術家は初めのうちは失敗を避ける爲めに、ひたすら他國の作品の眞似ばかりしてゐた。で、美術院の連中の中にも色々の派が出来た。ダビドの模倣者は素足で裾の開いたマントルを着てゐるスバルタ人や羅馬人はかり書いた。

一八一二年の國民的復興は、文學の上には多大の刺撃を與へたが、繪畫にはさした影響もなかつた。ニコラス皇帝はペーロフ及びコツエビユーと云ふ二人の畫



家を養つてゐた。前者は『ポンペーの最期』と題する冷靜なアカデミカルな畫で後者はスボロフとクツゾフの戦捷を描いた畫で名高くなつた者だ。その頃イワノフと言ふ獨創の畫家が現はれ、後で有名になつたが、その人は未製品の繪をたつた一枚残しただけだ。

その頃ゴーゴルはイワノフの知己で、あれだけの大作になつた腹案を聖書のなかから見付けて遣つたのは彼であつた。ゴーゴルはその繪の出來榮に満足できな  
いで、幾度も畫家に描き直さした。で、二十年も續けてイワノフはこの『基督の  
降來』にはかり掛つてゐた。ヨルダンの岸に一群の人がバプテスマのヨハネを圍  
んで立つてゐる。人々はヨハネの指さす方へ向いて、遠く凝視してゐる。すると、  
彼方の高地からジェサスが現はれる。彼は悲を帯びた顔をしてその聖い足で地を  
輝やかし乍ら徐々と群集の方へ近づくのである。

それ等の群集の顔の表情は、一々根氣強い熱心を以て描かれた。たゞ色彩の貧

弱なのが缺點だ。露西亞美術研究の金鏝とも謂ふべき莫斯科のトレチアコフの陳  
列室へ行くと、この繪が出來上るまでの研究の結果を一々辿ることが能なる。

露西亞に實際の畫家が現はれて、その邦の鑑賞家が自分の家の壁を飾る爲めに  
外國まで畫を買ひに行く必要のなくなつたのは、過古廿五年來のことだ。丁度を  
の頃は、農奴解放が行はれ、五百萬人からの生靈が赦免されて、自由の大風が全  
土を靡かした時であつた。美術家は一齊に起つてその畫巾の上に——時には非常  
な大幅のものへ——彼等の國民的生活からの意味ある出來事を寫すやうになつ  
た。丁度、同時代の文學者がその邦の社界を四冊からの浩濶な小説に描いたやう  
に。そして世間でもつい近頃まで外國物にはかり尊敬を拂つてゐた反動として、  
國民藝術に興味を有つことが流行つて來た。美術家は好く賣つた。で、その顧客  
の中にはトレチアコフのやうな好事家が出て、彼の露西亞美術の倉庫は『ハーミ  
ツテージ』の國立博物館よりも幾層倍大きく、精撰されてゐると言はれる位だ。



文學と美術の關係も漸く開けた。雙方相並んで、同じやうな力と速度を以て、貴族的ローマンチズムから平民の現實的描寫に移つた。文學ではプーシユキンやレルモンツフの優雅な主人公がトルストイやドストイエフスキの素朴な人物に席を譲り、美術では上流世界の偉大華麗な行爲を描くことが廢つて、虐げられた不幸な生活からの大膽な悲惨な寫實が頭を擡げて來た。現實に對する藝術的忠實と云ふ點のみから言へば、露西亞は遠く波蘭を陵駕して、佛蘭西に近づいてゐる。

聖彼得堡の美術院は確かに一種の藝術上の聖務院だ。何處の邦でも同じやうな官臭(Tchinovisme)が露西亞にも漲つてゐる。院の首腦は皆な美術的趣味のない者ばかりだ。官制上ウラジミル大公が總裁になつて、ある休職總督が其實權を握つてゐる。生徒にはいつも同じやうな畫題が課せられる、例へば、ヘクトルの屍を捜しに來たプリアムと云ふやうな。で、光線は何方から來て、誰が前景

に立たねばならないなどと云ふことが決められてゐる。生徒の方で、プリアム帝王やその宮殿よりも町の隅に立つ林檎賣の老婆を面白く思つたからとて仕方がない。何でもかでもプリアムやヘクトラを描かなければならなかつた。

露西亞近代の藝術家の中には裝飾的彩色派の一群がある。そのうち最も知られてゐるのは露西亞人ではないが、始終露西亞ではかり展覽會に出品してゐる。この人はセミラドスキーと呼ぶ波蘭人で、マカルトの影響をうけた者だ。「活きた炬火」劍の舞「少女か瓶か」など云ふ彼の作は、寫真板になつて廣く世間に行はれてゐるから、讀者も定めし御承知であらう。彼の繪の特徴は、ある光景に伴ふ情趣とか、感情の表現とか云ふ高い意味の藝術ではない。その得意とする所は寧ろ事物の正確な描寫と構想の繪畫的華麗な點にある。

セミラドスキー程の想像力を缺いてはゐるが、彼に能く似た露西亞の畫家でマコプスキーと云ふ人がある。彼は快活な色彩派だけで深酷な所はなかつた。一八



八七年に、彼は聖彼得堡で、アメリカ人に買はれたその大作「花嫁を擇びつゝある皇帝アレキシス」を出品した。この畫題は、その擇ばれた花嫁が彼得大帝の母であること云ふ點から愛國的興味を有つたものだ。彼はまたその畫題を利用して其時代の服装をした奇麗な若い娘の一面を描いた。で、可笑な事には、皇帝の撰擇しやうと云ふ多數の娘を描くに、彼は唯つた一人のモデル——自分の美しい妻——を用ゐたらしい。要するにこの繪は一種の模様畫に過ぎないものだ。その後彼の描いた『イワン暴帝の死』も矢張同様で、評判ほどの物ではない。

最近の露西亞美術界ではベレンスチャギンが獨特の壇場を占めてゐる。彼はその非凡の天才を有ち乍ら却て自分の才を呪咀したので有名である。彼の傳記はわが國の文壇までも賑はし、その繪はコーベンハーゲンでも澤山に觀ることができた。若し自分で欲すれば、彼は色彩派としても充分に成功することの能きた人だ。彼の非常に多い繪のうちには『死人の野』のやうに、觀者の記憶から永久に消すこ

との能きない物が幾つもある。彼を正當に判斷しやうとする者は、彼が自分で持出して、ハンドオルガンを聞かせ乍ら、電氣の光に照して、邦々を遣つて歩いた展覽會を觀たばかりでは可けない。莫斯科のトレチアコフの陳列室にある集成をも見訪はなくてはならない。ベレンスチャギンは實に生粹な露西亞人だ。その冒險的漂泊生活を好む點に於て、その藝術の極端な寫實主義と象徴的神秘主義の結合である點に於て（例へば戦争の諷刺畫のやうな）彼とトルストイとの間には確かに一道の共通點がある。彼はトルストイの著作の説明書を作つた人だ。「戦争と平和」は殊に彼の才能に適してゐた。ド、ボギューエが彼の戦争觀を論じて、平和を愛し乍ら戦を描寫する作者に見立てたのは至論である。（譯者曰、ド、ボギューエ子爵は一八七六年より一八八二年まで露西亞に滞在した佛蘭西の外交官である。彼がその滞在中に得た知識を以て露西亞を西歐に紹介した功績は實に偉大なものであつた。殊にその著『露西亞の小説』は批評界に新紀元を劃したと言はれるほど



のもので今尚ほ斯界にオーソリチーをなしてゐる。で、この人の名は露西亞研究者には忘るべからざるものである。)

近代の露西亞の藝術家のうちでも、一番私に感銘を與へた二人の畫家がある。それはリエビンとクラムスコイとである。

クラムスコイは一八八七年の春に死亡した。彼の得意は肖像畫であつた。トレチアコフの陳列室に行くと、彼と同時代の著名な露西亞人で、ヘルツエンやピエリンスキーやツルゲルネフやドストイエフスキーなどを描いた大膽な意義ある一列の肖像畫がある。この畫家が死んだ後で、美術院で彼の遺作展覽會を開いたことがあつたが、中に二つの宗教畫が見えた。その一つは思想の重荷を負ひ斷食の爲めに疲せ衰へた『曠野の基督』を描いたもので、他のは未完の大作『ピラトの前の基督』と謂ふのであつた。その他は五室に滿ちた肖像畫ばかりで、小露西亞の詩人チエブチエンコを描いた物が特に振つてゐた。この人は散々苦勞をして、

能く詩を作つた人だ。

クラムスコイは一八三七年オストロゴイスク市に近い小露西亞の村で生れた。彼の父は小商人でその母も一生を臺處で過すやうな人であつた。彼は初めその村の寺小屋へ通はされた。七歳の時には既う泥土でコサツク人の形を作つたりした。十三歳の時繪畫の勉強をしたいと言つて兩親に申出したが許されなかつた。畫家と云ふ者は『徒足で歩く』ものだと云ふとを村の人は皆な能く知つてゐたからだ。でも彼は暇さへあれば、手當次第に實物を描いたり、寺の肖像畫を殘らず寫したりしてゐたので、一二年過つてたらパロネツの一番上手な彫刻師の所へ遣られた。然かし其處では町への用達にはかり使はれて、打たれるほかにに慰みも何もなかつた。彼は僅か三月で其處を去つた。十七歳から二十歳まで彼はオストロゴイスクから來た寫眞師に隨いて、畫の手直しを遣りながら、露西亞の地方から地方へと迷つた。一ヶ月二留半の收入を齎したこの長い漂浪生活の間に、彼は手に入



り得るだけの書物は能く読み讀みした。殊にゴーゴルとレルモントフが氣に適つてゐた。遂々二十歳の時に聖彼得堡の街へ足を踏入れて、幸福にも美術院へ入學を許可されたのであつた。彼は『藝術』の宮へ詣でた思ひをした。

然かし、彼の失望は並々ではなかつた。教授法が餘りに馬鹿げてゐた。上級になればなるほど猶それが悪くなつた。若い人々の夫々の天性などは少しも顧みられなかつた。で、何時も聖書の中にある同じ題目ばかり課せられた。それはイワノフが同じやうな失望を忍んでから廿年目であつた。一八五八年には頂度この畫家はその傑作を携へて聖彼得堡へ來た。クラムスコイはこの特殊の繪を觀て痛く感動された。そして其作意の中に天才の力を見、畫中の人物の表情の眞を賞玩した。彼はその手紙で、この繪のヨハネの顔をミロのビーナスやシスチン、マドンナのそれと同じ程度のものだと譽め、聖彼得堡の群集がこの大作のなかの缺點よりほか見ることの能きないのを非常に憤慨した。

クラムスコイは二三の賞與にもありつゐた。で、今年一經てば、美術院の費用で外國へ留學ができることになつてゐた。所が、教授法の不平から、彼は他の十四人の仲間と一緒に急に學校を退いて了つた。露西亞の藝術を舊習から救ひ出したのは實に是等の十五人の人達であつた。クラムスコイは夙くに結婚した。で、彼の家は若い美術家の集合所になつてゐた。新運動の頭目と見做された彼は自身斷へ間なく勞作した。熱心にあらゆる知識を漁つた。彼の報道と知識に對する欲望は學生と名の附く何んな者をも尊重するほどに旺んであつた。彼の素朴と親切とは何人の心をも得ずには置かなかつた。

丁度その時、リエピンが彼の所へ弟子入した。で、直に親しい朋友に成つた。一八六八年に彼はまた風景畫家バシリエフと知り合つた。この人が後年彼に非常な感化を與へた。一方はバシリエフがあらゆる大家の獨創を彼に吹込めば、一方にはリエピンがその大膽な筆致で彼を興奮させた。一八六八年からクラムスコイ



は名を上げた。昔の美術院の敵は、今はその會員に撰ばれた。次第に彼は色彩派に移た。一八七六年に彼が巴里から書いた手紙に恚う言つてある。自分は今迄形象ばかりを貴んで來たが、今初めて繪畫の恚んな物であるかを知つた。自分はベラスケスの崇拜者になつた。「あらゆる物が彼の繪と比較されると色を失つて見すばらしくなつて了ふ。彼は彼の神經で繪を描いた。彼の與へる印象は壓碎である。そのほかには形容すべき言葉がない」と。

クラムスコイは勞作中に死んだ。それは一八八七年の出來事で、彼がある侍醫の肖像を描いてゐるうちに、畫筆を手から落すとその儘、前方に倒つたきり呼吸をひき取つた。何人もが彼のやうに斯あいろくと形相を變へて露西亞人を描いた者はない。

彼の弟子のリエピンは今日露西亞第一の藝術家で、歴史畫から名を擧げた人である。女王ソフィアを描いたものや、評判の畫でイワン暴帝が自分で擊殺した

皇子の死骸の上に絶望の餘り倒れ懸つてゐる所を描いた物なぞがある。後の繪は殊に傑作で好く描かれてゐる。觀てゐると眞實に血の池の臭を嗅ぐやうな氣がする。

然かし是等の畫はリエピンの特色を充分に發揮した物ではない。矢張現代を描いた物の方に好いがある。是等の畫には素朴な力があり、深い純白な熱誠があり、人を魔するやうな情愛が籠つてゐる。彼は正確な意味の近代的露西亞とも稱ぶべきものを其畫布の上に捕えた。是が爲めに彼の繪は一部の人からは有目的の繪畫——根本繪畫と考へられてゐる。で、其製作の中には現代の理智ある青年の群や、髪を短かくかつた賢い顔の女學生などが現はれて來る。彼はまたヴォルガ河を溯つて船を推す「ブルラキ」を描いた。腰を曲げて汗をかき乍ら、襪の中から隆々たる筋肉を現してゐる、これ等の勞働者の或は振れた或は失望した顔付が非常に好く描けてゐる。彼はまた日常生活で能く見る新兵の門出とか少年がそ



の故郷を出立する光景とかを好んで筆にした。それから亦『流刑人の歸郷』と云ふのがあるが、純朴な中にも人の胸を刺すやうな繪で、見素ばらしい衣物を着た憔悴た若者が除かに戸を排けて這入つてくるのを、その母や妹がたゞ驚いて注目してゐる眼付と云つたら忘れることの能きないものだ。

彼の繪は現實描寫の露骨を深い同情で包んでゐる。

現代の露西亞では是等の畫家と肩を並べるとの能き彫刻家がたつた一人ある。

それはアントカスキーで、彫刻史上に珍らしい猶太人の出である。彼は若い頃は非常に貧困な中に育つて、始めて其才能の認められた頃は聖彼得堡で靴屋をしてゐた。富有な慈善心の深い銀行家のグンツベルと男爵が彼を拾つて助けて呉れたが、小時後には其名を上げた。長いと羅馬に滞在し、今は巴里の住民となつて、廣い歐洲での名聲を樂しんでゐる。

アントカスキーの『基督』は確かジニリアス、ランゲの『彫刻史』にも出てゐたと

思ふ。兩足をまとめて縛られたなり、足には大きな草履をはき、焼きつくやうな大陽に晒されるので汗で頭髮が眉毛に附着いてゐる。その時代の服裝を着せ、悲愴な現實で觀者に迫る所は正に一個の眞面目な實際の猶太型だ。少し俯面してゐるが、思慮深い眼付で、男らしい決心を以て群衆の侮辱を甘受してゐる。其形相の中には露西亞流のストイキズムが在る。

アントカスキーの他の製作でイワン暴王の死を現はした物があるが、矢張劣らない傑作だ。帝王が肘椅子に靠れて刻々に迫る最期を待つてゐる。その姿勢には確かにハウダン作『ポルテア』を模ねたらしい所があつて、何か探してもするやうに手を椅子の上に投げ出してゐる。で、將に光の消えやうとする眼の前を、彼が嘗て死刑に處した三千五百の生靈が靜かに過ぎ行くかのやうな面影が窺はれる。

ランゲの評に依ると『この作はマクベスの獨語に似た所がある』。  
グンツベルと男爵の所藏で、アントカスキーの作つた彼得大帝の大きな半身像



の傑作があるが、その像には大帝を英雄化してあつて、帝王的の美と偉大な意志の力を現はしてゐる。また男爵の亡妻の似顔に作つた心行くばかりな半身像がある。その他この彫刻家の製作のうちでも、思慮ある顔に微笑を湛へたスビーノザの像は注意すべきものだ。

で、この邦の彫刻界で今日茲に特筆するべき名前は一人に限られてゐるもの、然かしこの方面に於て將來露西亞は有望で或つて、幾多の彫塑術の才人が工藝美術に従事して居る。この邦の特色としてある高貴な人の祝日や、記念祭には必ず二三の金銀製の彫像を贈物にするのが例となつてゐる。時によると寶物商が或る會から立派な藝術品を仕上げると云ふ條件で、二萬五千留からの高價な注文を受けることがある色彩に關する露西亞人の趣味は建築などよりも却て斯様な小さな製作品に於て心持よく現はれてゐるので、莫斯科の寶物商などは、濃淡如何なる色をも金銀と調和させる法を知つてゐる。不幸にしてコオペンハーゲンの博覽

會などで見るとの能きる物は充分に露西亞の特色を發揮してゐない。なせなら一部の職人は佛蘭西式の結構や型に迷はされてゐるし、また此方に來るものは露西亞本土の作品よりも高加索の山男の造つた物が多いからだ。で、獨創を發揮すると云ふよりも寧ろ優美な物を作るとを考へ、外國人に其本土で露西亞の法式と精神を以て藝術品を工案するやうに仕向けるよりも、自國民の模倣の才を示すやうな真似をしてゐる。(譯者曰、ブランドデスの豫想のやうに、其後露西亞にはポール、ツロベツコイと云ふ偉大な彫刻家が現れた。彼は露西亞のロダンと稱はれてゐる。その他畫家にもリエピンの後をうけていろいろの才人が現はれた。)



明治四十五年二月二十日印刷  
 明治四十五年二月廿四日發行

露國印象記

定價金八十五錢



譯者

中澤重雄

發行者

矢島一三  
 東京市神田區表神保町二番地

發行所

中興館  
 東京市神田區表神保町二番地  
 (振替口座東京四二)

印刷者

矢島源三郎  
 東京市神田區表神保町二番地

大賣所

東京 光風館書店  
 東京 東堂書店  
 東京 至誠堂書店  
 東京 林文次郎館  
 大坂 大坂 盛文館  
 大坂 同古屋  
 名古屋 川正堂書店  
 名古屋 星野松次郎館  
 名古屋 菊竹金次郎館  
 長崎 長崎 金澤宇都宮書店  
 長崎 長崎 西澤喜太郎  
 仙臺 仙臺 高美書店  
 仙臺 仙臺 藤原金港堂  
 札幌 札幌 富貴堂書店







332

230







332

230

(M)

026873-000-9

332-230

露西亞印象記

ブランドス/著

M45

ADF-0055

